

異業種参入で JAS 有機カボチャ栽培

(遠別町 有限会社グリーンファームえんべつ 代表取締役 大垣 堯雄 氏)

1 経営の概要

- (1) 有機栽培経験年数
7年（有機 JAS 認証取得 平成15年）
- (2) 経営規模
農地 33.5ha（うち借地 33.5ha）
うち有機栽培 5ha
- (3) 労働力
役員 7名、専従従業員 2名、
パート雇用 6名



写真 1 有機認証を受けたほ場

- (4) 作物別作付面積及び作物別生産量（平成21年）

| 品 目 | 栽培面積 (ha) | 収量 (出荷量) | 備 考 |
|-----------|-----------|------------|--------|
| 春まき小麦 | 10 | 19,280kg | |
| 秋まき小麦 | 8 | 36,664kg | |
| 小豆 | 4 | 9,600kg | |
| 金時 | 2 | 3,600kg | |
| ジャガイモ | 1.3 | 34,184kg | |
| 長いも（特別栽培） | 1 | | 現在出荷始め |
| カボチャ | 7 | 約 70,000kg | |
| うち有機 | 5 | 約 3,500kg | |

2 有機農業取組の経緯等

- (1) 有機農業の取組動機
 - ・平成 15 年に建設業界の工事量減少に伴い、新たな事業展開を考えた中、遠別町が「有機の里」を掲げていたこともあり、地域の遊休農地や酪農家の余剰堆肥を利用し「有機かぼちゃ」を中心に農業生産法人として参入した。



写真 2 ほ場での大垣代表取締役（中央）

- (2) 取組経過
 - ・遊休農地を利用したため、JAS 有機の認証を平成 15 年の参入と同時に受けている。
 - ・開始当初はかぼちゃの他に馬鈴しょ（70a）も有機栽培を行ったが、馬鈴しょは一般市

場に出荷したため、価格のメリットが出ず1年で有機栽培を止めている。

- ・平成21年に他の有機農家からJAS有機の認証を受けたほ場2haを引き受け、有機かぼちゃの栽培を増やした。

(3) 有機農業取組の考え方（こだわり）

- ・特に大きなこだわりはないが、今年から出荷先の会社がつけている札幌のレストラン廃棄残渣で製造したボカシを利用しており、生産物がボカシ肥料として帰ってくる循環型農業を目指している。

3 有機栽培管理技術等の特徴

■かぼちゃ

[有機栽培管理の概要]

(1) 作業体系、作型、作付体系

- ・は種の日にははずらしているが、定植は5月20日から10日間ほどで終えている。
- ・品種の違いはあるが、ほぼ1作型である。

(2) 品種、種子

- ・品種：カロチン、白い九重栗、らいふく（種苗会社より購入）

(3) 育苗方法

- ・10cmポット育苗
- ・培土は河川土と堆肥に炭粉末を混和後、生石灰でpHを矯正している。

(4) 栽培方法

- ・露地マルチ栽培（マルチ幅130cm）
- ・定植直後に2本仕立てとする。



写真3 資材の炭粉末

(5) 生産性等

- ・慣行栽培も行っているが、収量性は慣行栽培に比べ70%ほどで、出荷までの貯蔵中に腐敗するものが多く、苦慮している。

[栽培管理技術等のポイント、工夫]

(1) 土づくり

- ・レストラン残渣物のボカシ肥料と地域の酪農家が生産する堆肥を利用。

(2) 施肥

- ・ニュー畑のおかず（有機ペレット464）200kg/10a+レストラン残渣物ボカシ肥料270kg/10a

(3) 土層改良

- ・遊休農地を利用しているため、参入時に排水改良などを行っている。

(4) 病虫害防除

- ・うどんこ病が最大の病害として考えている。
- ・対策は、発病初期に有機 JAS で使用が認められているジーフイン水和剤を使用。

(5) 雑草対策

- ・有機栽培としてかぼちゃを選定した理由は雑草対策が他の作物に比べ行いやすいため、株元はマルチで雑草を抑制し、畦間はつるが伸長するまでロータリーですき込んでいる。



写真4 ロータリー耕による雑草対策

4 生産物の出荷・販売

(1) 販売先

- ・株式会社 K&K (札幌市)、株式会社リブフーズ (東京都江戸川区)

(2) 販売先との取り決め、

- ・規格は問わず価格は固定で、箱当たり 1800 円 (10kg) で取引される。
- ・出荷は取引先からの連絡ごとに、希望数量を発送している。

(出荷は 11 月末まで)



写真5 出荷調整中のかぼちゃ

5 消費者との交流の取組

- ・直接ではないがレストランのシェフや有名パティシエにかぼちゃを使ってもらい、PRしている。

6 生産者のつながり、関係機関・団体等との関わり

- ・生産者間のつながりは特に持っていないが、今後有機農産物の情報を得るため、関係機関を含め検討している。

7 今後の課題と方向

- ・今年度急きょ増やした 2ha 分の有機 JAS 認証ほ場は、慣行栽培等へ減らす見込み。
- ・出荷が不定期で遅くなるため、貯蔵中の腐敗が大きな問題となっている。ロスを考えると有機 JAS 認証と価格固定のメリットが薄くなっている。
- ・有機 JAS の付加価値がどう着けられるかが今後の課題で、このままだと資金的に問題となってくる。
- ・有機栽培を始める場合、販売先等をしっかり確保してからでないと、経営が成り立たない。

〈作成：留萌農業改良普及センター〉